みめぐみの

第1部

みめぐみの

第1部

大谷光道著

目次

和讃講……2
十劫の昔……5
塵点久遠劫……8
武器？……12
阿弥陀仏の実在……14
報恩講……21
当て字……22
アミダは「計れない」……25
呼び声……28
あとがき……31

和讃講

今晩は。（今晩は。）

今、こちらのご住職がおっしゃったように、私がこの中で「一番お若い！」かどうかわかりませんけれども……（笑）。

今日をはじめといたしまして、二ヵ月に一回ずつぐらいお目にかかり、ご一緒の時間を頂戴できるようになって、ありがたく思っております。

どんな話になるか判りませんが、お付き合いいただきたいと思います。

また、なんでもお気付きの点とかお聞きになりたいことがありましたらおっしゃっていただいて、その場で答えが解りません時は次回までの宿題にさせていただく、ということにいたしたいと思います。

ご住職からの注文で、似たようなご和讃を二つずつ、それをもとに私の考えるところを話すようにということでした。

さっそく今日は、「弥陀成仏のこのかたは」というご和讃が丁度二つありますので、これについてお話したいと思います。

みなさん、非常によく勉強されていて、ことばの意味は全部お解りになっているそうなので（笑）、あまりお話しなくてもいいということでしたけども……（笑）。耳にタコができて具合悪いと思われるお方は、しばらくお休みになっていて結構です（大笑）。

弥陀成仏のこのかたは
いまに十劫をへたまへり
法身の光輪きはもなく
世の盲冥を照らすなり

『浄土和讃（讃阿弥陀仏偈和讃）』

弥陀成仏のこのかたは
いまに十劫ときたれど
塵点久遠劫よりも
ひさしき仏とみえたまふ

『浄土和讃（大経意）』

十劫の昔

落語にですね、

寿限無（じゅげむ）、寿限無、五劫のすり切れ、海砂利水魚（かいじゃりすいぎょ）の水行末（すいぎょうまつ）、雲行末、風来末、食う寝る所に住む所、……

っていうのがあるのをご存じですか。何かのときにお聞きになっているでしょう。私が小学校の時、お話が上手なので子供たちから人気の高かった先生がおられました。いろんな面白い話をして下さった中に、この寿限無さんのお話がありました。私は『寿限無』と言ったらこの先生の寿限無で、本物の落語の方は聞いたことがありません。

十劫というのは一劫の十倍で、劫というのは「非常に長い時間の単位」のことなんですが、「五劫のすり切れ」の「五劫」っていうのは五つの劫ですね。十劫の半分。

「非常に長い」と言うたらどの位なのか。仏教関係の辞典では、「何の何倍で……その又何倍で……」などとあって、あまりピンと来る説明がありません。その先生のお話では、一劫というのはどういうことかといいますと、

海岸に非常に大きな岩が、上の見えないほどの岩があって、そこへ千年に一ぺん天女が降りてきて、あのヒラヒラの衣で、――私も見たことは無いんですけど――そのヒラヒラの衣で岩をサラサラッと一回だけ撫でて、また空高く帰って行ってしまう。わずかでも岩が減るんですね（笑）。この岩が磨り減ってなくなるまでが一劫

なんですね。千年に一回舞い降りてきて、岩を薄い衣で撫でる、そしてその岩がすり切れる。だから、「五劫のすり切れ」なんですね。すり切れて無くなるのが一劫です。

それが、岩が五つ無くなって、五劫。十劫だと、岩が十個無くならんといかん。十劫の昔に阿弥陀様が成仏なさった、その時に仏様になられた。

仏様になられる前は
法藏菩薩という
修行中の菩薩様で
あった訳ですが、
はじめのご和讃では、
　阿弥陀様が成仏なさってから、
　今までに十劫の時間が経ってるよ。
また、もう一つのご和讃では、

阿弥陀様が成仏なさってから、今までに十劫の時間が経っているというんだけれども、そんなもんじゃない、もっとだよ。

と、おっしゃっているんですね。

「御開山の時代でもう十劫なんだから、それから八百年も経ってるんだから……」と言うたって、まだ、天女は一ぺんも降りてきてない（笑）。

塵点久遠劫

今度は二つめのご和讃にある「塵点久遠劫」、これはどんなことかといいますと、「塵」ていうのは埃、チリですね。言葉通りに読むと「埃の点ほどの久遠の大昔」……。何のことかさっぱり分かりませんね。そこでまた辞書で一生懸命調べましたら、三千塵点劫ということと同じだと書いてあります。その三千塵点劫がどういうことかといいますと、その前に「三千大千世界」というのが必要になります。これはお経の中に出てきて、いつも皆さんご一緒

に唱えておられるでしょう、あの『阿弥陀経』に何度も出てきますね。

まず、古代インドの考え方で、私達が今ここに住んでいるこの世界を一須弥世界というそうですが、それは同時に一人の仏様が教化なさる世界の広さで、これを一つの世界とします。この世界が千集まって、一小千世界になる。

さらにその小千世界が千集まって、中千世界になる。その中千世界がまた千集まって大千世界になる。これ全部を、三千大千世界という。

それは千が三つですから、千かける千かける千で、十億世界というのと同じです。十億の世界。この私らのこういう世界を一つと数えて、十億の数の世界で、三千大千世界。

そこで話は塵点久遠劫に戻るのですが、

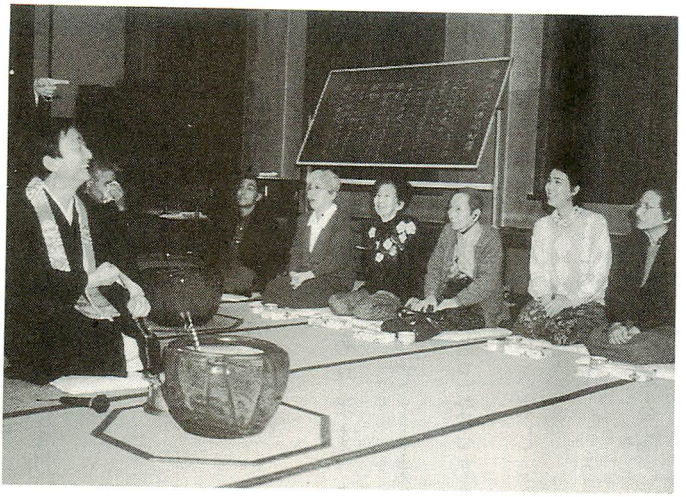
三千大千世界を全部、墨の粉のように細かく摺りつぶして、その粉を墨を摺るごとく摺って、東方へ向かって進み、千の仏国を通り過ぎた時に始めて墨を一つ落とす。さらに千の仏国を通り過ぎて一つの墨を落とす。

こうして、その墨が無くなって、――無くなるところまでいくつの仏国を通るか知りませんが、通りますね――こうして過ぎ去った世界を、もう一ぺん全部摺りつぶして墨にして、その一粒を一劫に数えた長さなんです。解りましたか（大笑）。

それほど大昔に、いや、ご和讃の本文では、

塵点久遠劫よりもひさしき仏

というのだから、さらにもっと昔に成仏なさったんだ。こういうことになるわけですね。「塵点久遠劫」という表現は、さっき申しました『大経』には書いてなくて、「十劫の昔」としか書いてありません。私などは十劫というだけでもうフラフラになりますが、御開山聖人は「十劫」ではどうしても満足なさらなかったんですね。「もっと、昔やでー」というふうにお感じになって、もう一つ別に、同じ「弥陀成仏」でも「塵点久遠劫」のご和讃をお作りになったんだといえます。



左訓（ご自身でつけられた注釈）に「塵点久遠劫」のことを、

「一大三千界（三千大千世界）をすみにして、このすみを、ふでのさきにつけて、くにひとつにちとつけ、くにひとつにちとつけて、つけつくして、このちりのかずをかぞへて、つもりたるを、ぢんでんくおんこふといふなり」

とあり、「ちとつけて」などと御開山としてはまことにおどけた表現をして楽しんでおられることがわかりま

す。

「十劫」というのも「塵点久遠劫」というのも、口で言ってしまえばひとことですが、実際それだけの昔という計り知れない大昔に阿弥陀様が成仏されたということです。

武器？

次に「法身の光輪」とあります。「法身」というのは、仏の三身といって、仏様の三つの現れ方の一つで――またお話ししますが――私たちには一番わかりにくい、が、一番もととなるありかたで、形には見えない、形も色もない、仏様の神髄と言っておきましょう。

「法身の光輪」、この光の輪というのはどういうことかと申しますと、仏様から発せられる光、光明による輪。

ところで、この輪（わ、りん）なんですが、これもいくつかの字引を引き

ました。だいたい古代のインドでは車輪というのは「大きな物で力強いものと考えられていた」くらいに思っておりましたら、輪というのは、昔のインドの武器だったそうです。なぜ、ここで武器が出てくるかというと、仏様の法、仏法でもって私達の「迷いを打ち砕く」、そういう力になるものという意味で「輪」という言葉が使われるわけです。つまり、「法身の光輪」というのは、仏様の光で私達を説法していただく、その働きのことですね。

それが、きはもないということです。光がずっと広がっていて、どこまで行っても終りがない。例えば、今ここは夜ですから蛍光灯が点いていてどこも明るいですが、昼間だと窓から光が入って、入った所は明るいけども、反対側の方は暗い。これは際、終わりがあるわけですね。しかし、際がないということは、こちらから光が入ってるのにあちらの隅まで明るい。そういう意味ですね。

「盲冥」というのは目が見えないことで、「世」というのは世の中のことで

す。「世の盲冥」というのは、煩悩のために目を覆われてものが正しく見えない者――つまり私たちのような凡夫――の目の前にも光を当てて正しく見えるようにして下さる、ということが書いてあるわけですね。

阿弥陀仏の実在

ここまではだいたい言葉のご説明なのですが、お休みになっていたかたも今度は起きてこの後は聞いていただきたいんですが(笑)、私、あちらこちらで御用をおおせつかりましては、出掛けてお話をさせていただきますが、その中でちょっと気になる質問がございました。

どういうことかといいますと、ある男の方が質問されまして、

「友達から『あなたの信じてる阿弥陀様という仏様は、実在で無いんだ。そんなもの信じててどうするのや』と言われて心配です」

ということでした。まず、

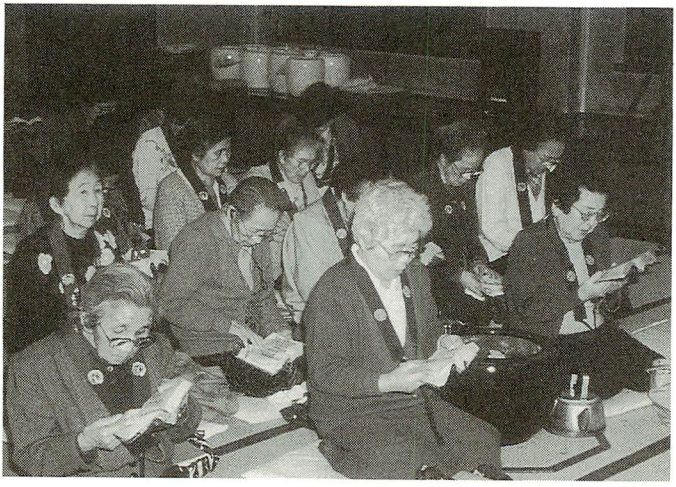
「ご自分の仏様をもっと信頼しないといけませんよ」と申し上げて、それからいろいろお話をいたしました。

「実在とは何か」などと言い出すと哲学の話になってしまいますが、このご質問の趣はどうやら、仏様が目に見えるとか、耳に聞こえるとか、触れるとかということであったようでした。

お釈迦様の昔にも同じ様なことを心配される方があったんですね。さっき申しました『大経』、ともう一つみなさんよく唱えてられるでしょう、『阿弥陀経』。で、もうひとつ浄土真宗で大切なお経に『観経』というのがあります。正確には『観無量寿経』というお経で、ご存知かも知れませんが、その中には「定善」と「散善」ということが説かれていて、「定善」というのは一種の精神統一ですね。仏様を見るという修行をするわけです。その修行に十三の段階があるのですが、その丁度真中の第七段（第七観という）のところで「華座観」というのですが、お釈迦様が説法されていた所へ、すっと阿

弥陀様と観音菩薩、勢至菩薩が空中にお出ましになる場面があります。

私はもちろんそんな力がないからお釈迦様の真似はできませんが、阿弥陀様のご意思ではあるのですが、同時にお釈迦様のお力で阿弥陀様を目に見える形で、そこで説法を聴いておられた皆さんに見せておられる、ともいえるわけです。何千年も前にお釈迦様がすでに見せておられる。ですから、「実在するかどうかが心配であれば、そのお経を読んで下さい」と、こういうことにもなるわけです



ね。

また、見えるもの、聞こえるもの、触れるものしか実在の中に入れないというのであれば、「テレビとかラジオというものは、どうして見えたり聞こえたりするんですか」と、私は伺いたい。というのは、電波というものをみなさんご覧になったことがありますか。もしあったら私も一緒に見せてほしい。電波というのはここにも飛んでるんですよ。このごろほら携帯電話っていうのが流行ってる。あれも、電波で声が届くんですよ。でも、電波見えないでしょ、見えないけどあるんですよ。だから、見えるものしか当てにしないということでは通っていけない世の中に住んでいるんですね。

また、私たちには重力というものが働いていますね。それも見えないでしょ。高い所から落ちて怪我するのも地球の重力のせいですよね。怪我して初めて重力があるんだなと、いうことが解る。

さらにまた、時計を見ると時間がわかりますね、時計が無かったら時間わ

かりますか。ちょっと暗くなってきたから夜やなとか、明るくなってきたから朝やとか、お腹も減ってきたからもう六時ごろかなとかですね。別のものを通じて時間を感じる、何かを通じて時間を知る。何かの媒介がないと時間というものはわからない。我々は直接時間を知るための感覚器官を持っていないのです。

これに反して物の大きさとか長さとかは見たらわかる。目という感覚器官があるからです。しかし、時間というものは、本当にわかっているようでもよく考えてみると、なにか機械を、そういう時計とか、あるいは別のもの、たとえば腹時計、を通じないと、どれだけ時間がたったかわからない。

だから、それほどに、人間というのは、なんでもかんでも解っているようで極めて情ないものなんですね。「万物の霊長」なんて私の嫌いな言葉がありますが……、本当に「霊長」なんですかねえ。本当に見たようなつもりになっていても、本当に見たのかどうか解らんていうこともありますでしょ。「あ

れ、夢やったのかな、どっちやったかな」ていうこと、そういういい加減な、そういう存在ですね。

私たちが「確かだ」と思うことのお粗末さが実感されます。つまり、こういうお粗末な世界の中に、仏様がそんな簡単にチラチラ見えたりなんかしたら、その方が困ります。私たちのこんなちっぽけな世界に阿弥陀様を引きずり込んで閉じ込めてはいけないのです。自分の実在がお粗末であるから、そのお粗末なところからすくい出してもらうのに阿弥陀様がおいでになるのだから、私たちと同じ世界が阿弥陀様の根拠地であってはならないのです。

ですから、見えたり、聞こえたり、触ったりということじゃなくて、もっと感じるといいますかね。響くというか、そういうものが私達の体を通して、例えば、口に「南無阿弥陀仏」というふうに出ておいでになるわけですよね。このことが一番確かな実在ではないでしょうか。

自分の実在のお粗末さ、お粗末でありながら、いやお粗末であるからこそ、

生命（せいめい）の根底から支えてくださる力、この力を阿弥陀様の本願力というのでしたね。この力の確かさの一つの現れが、今日初めから説明してきた阿弥陀様の寿命と光、無量寿と無量光であると、こう結びたいと思います。

繰り返しになりますが、計り知れない長い時間、そしてどこまで行っても無くならない光明、それだけの時間と空間を貫いたおはたらき、このことが何よりの真実の証（あかし）であると存じます。

報恩講

いつも皆様方のご家庭を会所（えしょ）にしてくださって、ありがたく存じます。今年もよろしくお願いいたします。

報恩講と申しますのは、その字の通り御恩に報いる集まりということであります。御恩というのは直接的には、御開山親鸞聖人、あるいはまた前住闡如上人ですけれども、やはり究極は阿弥陀様に御恩を報じることであります。そしてまたお釈迦様から七高僧――七高僧といいますと、先程皆でお勤めした正信偈の中にも順番に高僧方のお話が出て参ります――七人の高僧方のそ

れぞれのお示しによって、御開山様がお説き下さった浄土真宗のみ教えが、漠然と私たちにというよりも、この私に届いたこの御恩に報いようという者達の集まりであります。ただ何ということなしに、私たちは浄土真宗の教えをいただいているように思いますが、この私にまで届くということの大変さというのは、考えてみると色んな事が出て参ると思います。

当て字

ところで、大分以前になりますが、真宗王国などと言われる北陸で、ある方から、

「南無阿弥陀仏ということばの意味がよく分かりません。仏壇の前で手を合わせるけれども、或いは南無阿弥陀仏を称えるのだけれども、今更何ですかといってだれかに聞くのも恥ずかしいし……」

という質問を受けました。ここにおいでになる方々は恐らく、

「そんな話はわかっているから別の話をせい」

とおっしゃるかもしれません。けれども、聞いてみていただいて、或いはお役に立つかも知れないと思います。

先ず最初に私が申しましたのは、

「この南無阿弥陀仏の六文字というものは、これは文字そのものには文字本来の意味はない。全部当て字ですよ」ということを申し上げました。そこから話が始まったのであります。

よその宗旨で「南無妙法蓮華経」とか「南無大師遍照金剛」とか、また「南無……」とおっしゃるところがありますが、ナムというのは南、そしてム、無いという字、これは南――みなみ――という意味もなければ、無――ない――という意味もない訳ですね。もともとインドのナムという言葉に中国の漢字を当てて読んだわけですね。ですから、もちろん「ナム」という言葉のその中には、深い意味があります。けれども、南(みなみ)とか無(な)いという字の漢字と

しての意味はなく、当て字です。

私たちがアメリカのことを米国と言ったり、或いはフランスのことが仏国と書いてありますが、あれは「仏」という字と花の「蘭」という字と「西」という字を書いてフランスと読ませて、その最初の「仏」から「仏国」とした。いつ誰が決めたのか知りませんが、そういうのを当て字と申しますね。またアメリカのことは「亜」という字と「米」と利益の「利」と「加える」ですか。そういうのを明治以降だと思いますけれども、どなたかがそういう字を決めて使うことにした。私が小学校の頃、名前で「英」のつく同級生のことをイギリス人なのかなと真剣に考えていた頃がありました（笑）。

ナムというのも、それが英語でなくてインド語であるという、それだけの違いなんですね。そのナムというのにああいう漢字を当てた。そしてまたアミダ、いざ書けといわれると結構難しい字であったなと気づかれると思います。この「阿」という字も、この間漢和辞典を引きましたら、「オカ」という

意味だと書いてありました。しかし、阿弥陀様の「阿」というのはアと読ませる為にあの字を使うのであって、オカという意味は無いんですね。それから、弥陀、皆同じです。

仏というのは、「覚者（さとったひと）」という意味のインド語「ブッダ」から来ておりまして、それに中国語の漢字のあの「仏」という字を当てたんです。この「仏」という字は本来「さかんである、ねじる、もとる」などの意味で、「ブッダ」（「覚者」）の意味は全くなかったんです。ところが、それ以後だんだんその中身を持ちまして、むしろ「ブッダ」の意味にしか使わなくなってしまった。だから「仏という字のもともとの意味は」などと今さら言うと、かえって混乱するかもしれません。

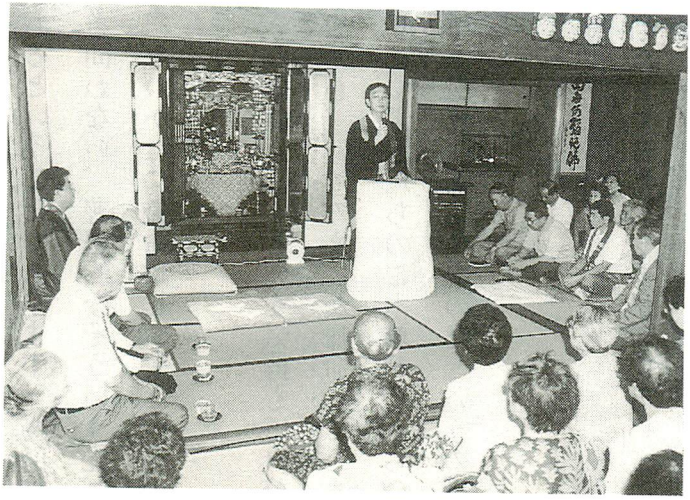
アミダは「計れない」

それでは、今度はそれぞれの本来の意味の方へまいりましょう。

ナムというのはどういうことかといいますと、「帰命」ということですね。「帰る」という字と「命（いのち）」という字を書きます。「自分のこの命を顧みることなく、信ずる」といいましょうか、それ程に深く信ずることを帰命と言いますね。

それから、アミダのミダは、一メーター、二メーター、長さの単位ありますね、一メートル、二メートルですね。このメーター、またはミーター「計る」に「ア」がついて、ア・ミーター「計ることが出来ない」という意味で、インドの言葉と英語などが元のところで繋がっておるのは興味のあるところで、アミダは「計ることの出来ない」という意味になります。

「ブッダ」、「仏」というのは「覚りを開いた人」ということですから、「計ることの出来ない覚られた方に帰命する」、これが南無阿弥陀仏ということです。もう一つ申しますとアミダという言葉が出来たのは、もう少し学のあるところをご披露いたしますと（笑）、インド語の「アミターユス」という「無



量寿」、計る事の出来ない寿命、命ですね。それから、「アミターバ」という「計る事の出来ない光」、「無量光」、光ですね。その二つが一つになってアミダという言葉になった。計る事の出来ない命と言うのは、別の言い方をしますと、いつまで経っても変わらない、どれだけ時間が経っても変わらない。或いは逆に時間を溯っていっても、どれだけ昔へ戻っても今と違わないということですね。そして、無量光というのは、計ることのできない光。光の当たるところ

は、私たちのいるこの空間、この場所、どこの場所へいっても同じように光があるということであります。場所を問わない、そして時間を問わない、時期を問わない、普遍的なそういう光、そして命、それをお持ちになった仏様、で、そのかたに帰命致しますというのが南無阿弥陀仏ということの意味であります。

その帰命しようという気持も、自分で自分を励ましたり言い聞かせたりしなくても、いつのまにか帰命してしまっていると、そういう不思議な帰命であります。私たちのご本尊が、もちろん阿弥陀仏なんですが、単に阿弥陀仏でなく南無阿弥陀仏なのだというのはこのためなのです。

呼び声

私たちの日常のこの世の中というのは、良いこと悪いこと、楽なこと苦しいことでいっぱいです。同じものや事柄でも私たち一人一人によって違った

ものになってくる。良いことでも悪く思えたり、悪いことが良いように思えたり、色々違って見えますけれども、ひとこと南無阿弥陀仏と称えることによって本当のものを知らせてくださる。本当の姿を見えるようにしてくださる。言ってみれば呼び声ですね。真実、真理の世界からの私たちに対する呼び声であり、また、かけ声でもあります。

ですから、たとえば朝起きましても、ふと南無阿弥陀仏と称えることによって、「あ、起きないかん時間やないか」。ごく簡単なことですが、すんなりと「この時間は起きないかんな」という気持ちにならせていただく。ところが、南無阿弥陀仏がないと、「もっと寝ていたいのに、いややなー」となる（笑）。

今日はこちらの報恩講ですけれども、皆さん方、みなさん朝起きられまして「南無阿弥陀仏」「あ、今日は報恩講」と、すっと足が向く。で、「どうしても眠いのを無理しても行かんといかん」というように自分に言って聞かせ

なくても、この「南無阿弥陀仏」の一言で、洋服に着替えて準備もすぐにできてしまって、足がすっと向くし、気が付いたら、さっさとこの道を歩いてしまっていたというお方も多かろうと思います。これがそのまま私たちの御恩報謝に繋がっておる訳でございます。報恩講だからといって特に力まなくてもお念仏ひとつ称えたことで、報恩講に歩いて来られるし、皆さん満足されてお帰りなっていただけるものと確信いたします。

今日はそんな分かり切ったことというふうにお思いなった方もおありになったかもしれませんが、もう一度、ここで「南無阿弥陀仏」というおことばの意味をかみしめていただきまして、今後のお念仏の生活にお役にたててただきたい。かように思います。

あとがき

みめぐみの刊行委員会

本願寺第24世大谷光暢御門跡の後を承けて、大谷光道台下は全国のご門徒との、膝を交えての語らいの輪を広げておられます。

とかく、難しいと考えられがちな宗教を、私達の日常に視点をおいた心から滲み出るお話により、わかり易く頷けるなごやかな集いとなり、正しい仏の智慧を蒙って勇気づけられることになります。この度、そのお話をテープに収録したものに修正を加えていただき、読みやすくして、小冊子にまとめました。

前門跡御夫妻の写真集『みめぐみの』のお心を引き継いだ、法話集『みめぐみの』第1部として読んでいただき、なじんだお念仏とともに、座右の書として、浄土真実の教えの響きを感ずるままに親しんでいただけるものと願うことであります。

みめぐみの　第1部

1997年7月15日　第一版発行
1997年10月27日　第四版発行　　定価 200円

著　者　大谷光道

発　行　みめぐみの刊行委員会
〒600 京都市下京区烏丸通七条上ル常葉町754
本願寺寺務所内
TEL.075(351)3555　FAX.075(351)3120
振替口座　01060-5-56990

印　刷　㈱中外日報

みめぐみの刊行委員会刊